2025年JWDA/調査研究部会_地方開催・熊本視察会セミナー報告

【視察２日目】

６月２７日（金）

8:４５　ホテル出発

9:１５ 視察①「浜田醤油（隈研吾設計）」見学

１１:１５視察②「熊本地震震災ミュージアム（2024年激励賞受賞作品）

１２:５０ ランチ　山見茶屋

１３:４５ 視察③「南阿蘇鉄道　高森駅（2024年受賞 環境大臣賞受賞作品）」

１５:４５　視察④「阿蘇くまもと空港（2024年受賞）」

SDGｓミライパーク見学

終了後　解散

【視察内容】

2日目の27日は、明治～昭和期に建てられた土蔵造や石造建築が国指定文化財でもある浜田醤油株式会社や震源地に近い益城町の震災ミュージアム、地震による耐震の見直しを図った高森駅交流施設、阿蘇くまもと空港など、復興と創造が交差する現場を見学し、熊本が歩んできた道と未来への可能性を体感しました。

視察①「浜田醤油（隈研吾設計）」見学

【概要】

熊本県熊本市西区にある浜田醤油合資会社は、1818年創業の老舗醤油蔵です。

2016年の熊本地震による被災を経て、創業200年の節目にあたり、世界的建築家・隈研吾氏の監修のもと歴史的建築の保存と再生プロジェクトが進められました。

今回の視察では、伝統的な木造醤油蔵の保存と活用、そして建築と地域文化の融合を中心

に確認しました。

【内容】

存建築の保存と再生

歴史的な木造醤油蔵は、明治から昭和初期にかけて建造された複数の蔵が現存しています。
震災での損傷を受けた部分は現代の耐震補強技術を用いて修復されつつ、隈研吾氏の監修により、木梁や柱、竹小舞の下地、漆喰のなまこ壁などの伝統的な構造意匠が露出され、蔵の歴史的風合いが活かされています

見学のポイントと空間体験

視察では、杉製の直径約２メートルの木桶（杉樽）が多数並ぶ蔵内空間を、階上から俯瞰できる形で見学しました。
樽が整然と並ぶ様子は圧巻で、木桶職人の伝統技術の重みと地域に根ざした醸造文化の継承を感じることができます。

また、施設内に設けられたバーのような空間では、熊本産の杉材がカウンターや壁材として用いられ、木材の質感や温かみが空間に豊かさを与えています。
隈研吾氏の「木を活かす建築」の思想が随所に反映されデザインされているそうです。
なお、醤油の製造工程の見学は樽の配置された蔵内の見学だけとのことですが、樽内の様子を伺いしれるように設計されています。

現代的な活用と地域発信

浜田醤油は、歴史的建築の保存に加え、ショップやカフェを併設し、訪れる人々が製品購入や地域の食文化を体験できる施設として運営されています。
SNS などの発信で海外からの来店もあるとの事です。
これにより、単なる醤油蔵としての機能にとどまらず、地域文化の発信拠点としての役割を担っています。

【考察】

浜田醤油の建築再生は、伝統的な構法や素材の魅力を活かしつつ、現代の技術による耐震補強や快適性向上を両立させた優れた事例です。
木製樽の保存とその存在感、歴史的蔵の構造美の露出など、建築が産業文化を伝えるメディアとなっています。
また、隈研吾氏の設計によって素材の自然な風合いが引き立ち、地域の気候風土と共鳴する空間づくりが実現されています。
地方の伝統産業施設が文化遺産として再生し、地域活性化に寄与するモデルケースとしての活用が感じられました。

►浜田醤油 HP　https://hamada1818.com/

視察②「熊本地震震災ミュージアム（2024 年激励賞受賞作品）

【概要】

熊本県阿蘇郡西原村に位置する「熊本地震震災ミュージアム「KIOKU」」は、
2016 年の熊本地震の記憶と教訓を次世代に伝えるための拠点施設。震源域に近く、特に大きな被害を受けたこの地域において、被災建物の一部を震災遺構として保存・展示するとともに、地域再生の象徴としての役割も担っています。

【内容】

建築構成と空間の特徴

建物は三つの展示ブロック（発災・復旧・未来）で構成され、それぞれをつなぐ回廊は、来館者が自然に空間を巡るように設計されています。
この回遊動線は「ぐるっと見まわせるように」と

いう設計思想に基づき、建物の内部と外部の風景が緩やかに連続するよう工夫しているとのことです。
全体に用いられた曲線的な造形は、訪問者の動きを柔らかく導き、緊張を和らげるような空間体験を生み出すためだそうです。
単なる視覚的な演出ではなく、震災という重いテーマに対して「包み込むような」優しさを木材を使うことによって表現しています。

また、館内の構造には「何ひとつ同じ高さがない」ように意図された変化があり、視覚的なリズムと空間の抑揚を作り出しています。
主要なスパンは鉄骨（S 造）で飛ばされており、RC（鉄筋コンクリート）と木造を組み合わせた混構造（RC＋S＋木造）により、構造的な安定性と木の温かさが両立されています。

地形との関係と設計思想

この建築は、阿蘇の雄大な自然を見渡せる位置に建てられており、窓や屋根のラインが周囲の山々と呼応するように配置されています。
これは震災の「記憶」を内包しながら、自然と共に生きること、再生に向かう歩みを建築のデザインで象徴的に表したためだそうです。
「過去の痛みを見つめながらも、自然と共に歩み、再生していく」という熊本の地域精神を体現する空間といえます。

建材と地域資源の活用

地域の復興の象徴としてのこだわり熊本の地域資源の活用にもありました。
柱の一部には小国杉（熊本県阿蘇郡小国町産）が使用されてます。小国杉は目が細かく、耐久性・加工性に優れ、地域材としての高い評価があるそうです。
壁には EP 材（エンジニアドパネル）が使われ、接着剤を一切使用せずに木材を機械的に組み上げることで、化学物質の排除と構造強度の確保を両立しています。

一方、大断面が必要な集成材は鹿児島県など県外で製材されたものを活用。県内では対応

が難しい精密な加工を補いながら、地元材との調和と品質のバランスを取るアプローチがとられたそうです。基本構造はRC（鉄筋コンクリート）により堅牢に仕上げられており、そこに木材の柔らかさを重ね合わせ、空間に安心感をもたらしていました。

屋根と外装のデザイン

建物の象徴ともいえる屋根は、阿蘇の黄土や野焼きの灰を使用して焼かれたオリジナルの焼成タイルを採用。このタイルは、外観に温かみを与えるだけでなく、阿蘇の自然を素材の中に取り込み、風景との一体感を醸し出すための重要役割をもっています。

展示の工夫：世代を超えた伝承へ

熊本県出身の漫画家・尾田栄一郎氏の代表作『ONE PIECE』のキャラクター像（ロビン像）が設置されており、訪問の機会を創出、震災の記憶を若い世代や海外からの旅行者にも自然に伝える工夫が施されていました。

ロビンは「歴史を読み解く」役割を担うキャラクターであり、その象徴性が施設の目的とも重なっています。

【考察】

震災ミュージアム「KIOKU」は、単なる記念施設ではなく、空間構成・自然との関係・素材選定・動線設計・表現方法のすべてにおいて「記憶の継承」と「地域の再生」という理念を体現した建築でした。

建築を学ぶ者にとっても、震災を学ぶために訪れた者にとっても、深い学びと再考の機会を与えてくれる場所です。

ミュージアムの静謐な空間に身を置いた瞬間、言葉にならない重みが胸にのしかかりました。展示以上に、空間が語っているようでした。

►関連サイト

・ウッドデザイン賞 「**熊本地震震災ミュージアム KIOKU**」

https://www.wooddesign.jp/db/production/2121/

・熊本地震震災ミュージアム

https://kumamotojishin-museum.com/

視察③「南阿蘇鉄道　高森駅（2024 年受賞 環境大臣賞受賞作品）」

【概要】

南阿蘇鉄道は 2016 年の熊本地震により甚大な被災を受け、2023 年に全線復旧したものです。その復興のシンボルとして整備された高森駅舎は、地域主導のプロポーザルと高森町・阿蘇県による「くまもとアートポリス事業」の一環として進められ、2024 年にはウッドデザイン賞・環境大臣賞を受賞しています。

長い回廊は阿蘇の魅力である根子岳と電車の発着を写真に収めるために考えられているそうです。
『ONE PIECE 熊本復興プロジェクト』の一環として「船大工」フランキー像が設置されています。
設計は、デザインヌーブ代表の建築家・太田浩史氏が担当。高森町や地元住民、中学生・高校生を巻き込んだワークショップ等を経て具体化したものです。

【内容】

高校生・住民参加型の設計過程地元住民や高校生によるワークショップを通じて、駅の望ましい姿や機能、交流空間の在り方を共創。中学生向けの模型製作や、高校生が提案した“みんなの書斎”（まちのラウンジ空間）は実際に実装に反映されました。

参加型設計によって、住民の声を建築に取り込む「共創型復興」のモデルを成立させたとのことです。
町には図書館がないため、設置された本棚に図書を持ち寄り徐々に増やすそうです。
全国でも珍しい「マンガ学科」が設置されている高森高校から将来漫画家となった出身者の本を並べたいという夢がある本棚です。

建築の特徴

主要構造材、内装材のほぼ全てに熊本県阿蘇・小国町の「小国杉」を使用。
特に天井面や壁、ベンチ、回廊の構造体など、木の香りと風合いを感じられる設計になっています。
大屋根を支える木製トラス構造や、三次元相持ち構造（修羅組み）による柱や回廊が設けられており、木材の強度と美しさを両立した空間になっています。

総延長 160 m にわたる西向き広いプラットフォームは、阿蘇の風景を取り込む設計意図が明確で、建物自体が風景となる構成が高く評価されています。

【考察】

駅舎内外において、小国杉材を用いた木の表情が豊かで、素材感と風景との調和により訪問者の感性を刺激する空間となっています。
「みんなの書斎」や回廊、芝生広場など、地域住民が気軽に集まり交流する設計によって、駅が人々に「開かれた公共空間」として機能していることが伝わってきました。
地元高校生や地域住民が関与した提案が形になっているこの場所に、当日も高校生が集っており、地場文化を反映する建築デザインの好例といえます。
木の香りとともに再び列車が発車する音が響き、地域が息を吹き返したような印象を受けました。
高校生や住民の設計参画と、すべてに小国杉を用いた木造構法の公共建築は、今後の地域再生・持続可能なまちづくりの指標になるいい事例です。

►関連サイト
・ウッドデザイン賞「南阿蘇鉄道高森駅・交流施設」
https://www.wooddesign.jp/db/production/2102/
・南阿蘇鉄道株式会社
https://www.mt-torokko.com/information/route/takamori/

視察④阿蘇くまもと空港 新旅客ターミナルビル（ウッドデザイン賞 2024 受賞）

【概要】

2024 年にウッドデザイン賞を受賞した「阿蘇くまもと空港 新旅客ターミナルビル」の視察。地域材の活用や木構造技術、意匠性・快適性の融合を学びました。
特に、熊本地震からの復興のシンボルとして再建された本施設において、どのように木材が機能的・象徴的に活用されているのか視察しました。

【内容】

建築の背景と再建の経緯

阿蘇くまもと空港の新旅客ターミナルビルは、2016 年の熊本地震により大きな被害を受けた旧施設に代わり、復興と地域振興を象徴する拠点として再建されたものです。
再建にあたっては、空港という建築規制の厳しい中で木材を利用することは大変厳しかったといいます。

地元熊本県産の小国杉を主要構造材および仕上げ材として積極的に使用し、地産地消の実践と地域経済への波及効果が意図されています。
加えて、環境性能の高い断熱パネルや制振構造を組み合わせることで、持続可能性と防災性の両立が図られ、建築基準を満たせました。

建築的特徴と技術的工夫

構造は鉄骨造を基本としつつも、屋根架構には住宅用の 2×4 材を活用した木製ワーレントラスが採用されています。10 メートルに及ぶスパンを無柱で実現し、空間的な開放感と木構造の美しさを両立させていました。
また、建物全体には約 800 ㎥に及ぶ地域杉材が用いられており、その色味や節の有無も計画的に管理されたうえで施工されているそうです。高断熱性能をもつ DSP（ダブルシールドパネル）の導入により、快適性と省エネルギー性も確保されています。

空間体験と木質演出の印象

ターミナル内部は天井を設けず、木架構を現しとすることで、来訪者の視覚と嗅覚に訴える空間演出がなされていました。木の香りと質感が旅客の緊張感を和らげ、居心地のよい「滞在型ターミナル」を体現されています。

大屋根のダイナミックな木架構は、意匠性のみならず熊本の自然や文化性とも結びついた象徴的な存在となっています。
地域らしさを随所に感じられ、まさに「熊本らしい空の玄関口」として強い印象を残す空間となっていました。

SDGs 広場の設置とその意義

空港内の一角には、「SDGs 広場」と称された展示・啓発スペースが設けられており、地元熊本の自然・文化・環境への取り組みや、空港自体が目指す持続可能な運営の方針がわかりやすく紹介されていました。
展示は視覚的にも親しみやすく、子どもから大人までが楽しく SDGs に触れることができる工夫がなされています。

この広場は単なる啓発の場にとどまらず、空港を利用するすべての人に対して「持続可能性とは何か」「地域とどうつながるか」を自問させるインターフェースとして活用されています。
地元企業ブースが設置されているフロアでは、三井不動産様ブースに非住宅木質化の紹介があり、森林資源循環の説明から木材利用の効果などが解説されていました。（ウッドデザイン賞受賞ロゴあり）

【考察】

木造建築と合わせて「環境配慮型空港」の一環として、今後の公共空間のウッドチェンジのあり方を示唆する場でもあると感じられました。
実際の視察を通して感じた最大の特徴は、木の持つ“やさしさ”が空間全体に浸透していた点です。

木材の視覚的なあたたかみと、香りや手触りが五感に訴え、公共施設でありながらどこか家庭的な安堵感を与えていました。
屋根架構に使用されたトラス構造は、単なる技術的処理を超え、デザインとしても高く評価されるべき構成となっていました。様々な規制がある空港という公的施設を木質化するというチャレンジは、さらなる可能性を期待できる見本となったと思います。

さらに、SDGs 広場が建築と思想を結びつけるハブとして機能していた点も見逃せません。
空港という「通過する場所」に、持続可能な地域社会へのまなざしを埋め込む試みは、今後の施設設計においても重要な視点となりそうです。

空港ターミナルの木組みに触れ、持続可能性を“空間の体験”として感じ取ることができたのは、資料を読むだけでは得られない収穫でした。

【総評】
阿蘇くまもと空港の木質化は、単なる内装演出にとどまらず、構造材として木を効果的に使い、地域振興・防災・脱炭素といった複数の社会的価値を統合する先進的な試みでした。
空港内に SDGs をテーマとした啓発スペースを併設した点も含め、地域と世界をつなぐ新しい公共建築のあり方を示していました。
今後、全国の空港や公共施設においても、こうした木質化と社会的テーマの可視化の手法は有効であり、特に地方自治体が地域産材を活かして魅力ある空間を創出するモデルケースとして参考となる事例でした。

▶関連サイト
・ウッドデザイン賞 「**阿蘇くまもと空港新旅客ターミナルビル**」
https://www.wooddesign.jp/db/production/2130/
・阿蘇くまもと空港
https://www.kumamoto-airport.co.jp/
・PR TIMES 「**世界で一番居心地のいい空港**」**をつくる**
https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000453.000051782.html

【全体視察総評】

今回の視察を通じて印象的であったのは、建築が単なる施設ではなく、記憶・文化・未来ビジョンを編み込む媒体となっている点です。

それぞれの建築は、地域固有の風土や歴史を基盤にしながら、現代の課題（震災復興、観光、環境教育）と向き合い、「空間を通じて問いを発する」力を持っていました。

特に熊本では、アートポリスの理念が培ってきた「建築を文化の一部とする意識」が、民間施設や震災後の復興建築にも波及していると感じられました。